

スコーピングレビューのための報告ガイドライン 日本語版: PRISMA-ScR

友利幸之介¹⁾, 澤田 辰徳¹⁾, 大野 勘太¹⁾, 高橋香代子²⁾, 沖田 勇帆³⁾

1) 東京工科大学 医療保健学部 作業療法学科

2) 北里大学 医療衛生学部 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

3) Soaring Health Sports, Wellness & Community Centre,

Key words: スコーピングレビュー, PRISMA-ScR, 文献レビュー

要旨: 近年, 比較的新しい文献レビューの手法として, スコーピングレビューが注目されている。スコーピングレビューでは, 既存の知見を網羅的に概観 (マッピング) および整理し, まだ研究されていない範囲 (ギャップ) を特定することを目的としており, その方法は, 様々な種類の文献・情報を対象とするが検索方法はシステマティックに行われる。本稿では, スコーピングレビューの方法について概説した後, その報告ガイドラインである, Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses extension for Scoping Reviews (PRISMA-ScR) の日本語版を紹介する。報告ガイドラインとは, 本来論文に最低限含める内容をチェックするためのものであるが, 研究計画の策定, 査読の際など, 様々な場面で活用いただけたら幸いである。

発行日: 2020年9月16日

文献レビューの相違点

1990年初頭からのEvidence based practice (EBP) の広まりと共に, 臨床家の意思決定において研究論文が果たす役割は拡大している。近年, 国内外では様々な文献データベースが存在し, 図書館に足を運ばずとも文献を簡単に入手し, 時間や場所を選ばずに閲覧することが可能となった。しかし, それでも多忙な臨床家や研究者にとって, 次々とアップデートされる文献一つ一つに目を通す時間は無く, 効率よく情報を収集するのに欠かせな

いのが文献レビューに目を通すことである。

文献レビューには様々な種類があり, Grantら¹⁾によれば14種類もあるとされているが, 大まかには表1の通り²⁾, ナラティブレビュー, システマティックレビュー (ここではメタアナリシスを含む), そしてスコーピングレビューの3つに大別される。まずナラティブレビューとは従来型の文献レビューで, 文献検索やデータ抽出の方法は明確に規定されているわけではなく著者に一任されている。総論や解説記事などがそれに該当する。ナラ

表1 各文献レビューの特徴と定義 (文献2より著者翻訳)

	ナラティブレビュー	スコーピングレビュー	システマティックレビュー
レビュープロトコル	NO	YES (部分的)	YES
プロトコルのPROSPEROへの登録	NO	NO ¹⁾	YES
明確かつ透明性の高い検索ストラテジー	NO	YES	YES
標準化されたデータ抽出フォーム	NO	YES	YES
質の評価の必須化 (バイアスリスク評価)	NO	NO ²⁾	YES
各研究の統合と要約の作成 ³⁾	NO	NO	YES

1: 現時点での状況で, 変更の可能性あり。2: 各論文の質の評価は必須ではないが, 場合によって実施されることがある。3: 統計的メタ分析 (量的有効性, 有病率や発症率, 診断精度, 病院またはリスク, 予後または心理測定的データ), メタ的統合 (経験的もしくは専門家の意見), もしくは両者を含めた混合メソッド。

ティレビューと対極をなすのがシステマティックレビューとメタアナリシスである。これらは研究実施前に厳格なプロトコルを作成してPROSPERO (International Prospective Register of Systematic Reviews) ³⁾へ登録し、再現可能な形式で文献の検索や選択を行う。また、1つ1つの研究論文に含まれるバイアスリスクをチェックし、最終的には結果を統合して要約(サマリー)を作成する。この統合において、システマティックレビューは質的統合、メタアナリシスは量的統合である。両者の違いは主にこの点にある。

一方、スコーピングレビューは、ナラティブレビューとシステマティックレビューの中間に位置している。すなわち、事前のプロトコルは概ね作成するが、PROSPEROへの登録はせず(つまり途中での変更も可能ということの意味している)、検索手順やデータ抽出の方法は明確だが、バイアスリスクの評価など個々の対象論文のチェックは任意の項目である。そしてレビューの結果は、幅広い知見を網羅的に概観(マッピング)することが主な目的となる。

スコーピングレビューとは

ArkseyとO'Malleyによれば⁴⁾、「スコーピングレビューとは、その研究領域の基盤となる主要な概念、主な情報源、利用可能な文献や情報(エビデンス)の種類を素早くまとめること」と定義し、その目的は、1) 研究活

動の幅広さ、範囲、性質を調べる、2) システマティックレビューを実施する価値があるか決定する、3) 研究結果の要約と普及、4) 既存の知見から研究ギャップを特定する、の4点にまとめている。またEhrichらは⁵⁾、「スコーピングレビューの目的は幅広い文献をマッピングすることと、ギャップやイノベティブなアプローチが存在する可能性がある場所を描くこと」と述べている。つまりスコーピングレビューとは、網羅的に既存の文献を調べ、ギャップを特定することと言える。ギャップとは、すき間、空白、抜けているものを意味し、ここでは研究する必要がある未解決な部分を指す。

スコーピングレビューの方法

スコーピングレビューは比較的新しい手法である。その系譜を確認すると、まず2005年にArkseyとO'Malley⁴⁾が方法論としてのスコーピングレビューを提案している。それを基盤に、Levacら(2010)⁶⁾や、The Joanna Briggs Institute(2015)⁷⁾が、より詳細な内容へと発展させ(表2参照)、2018年、Triccoらがこれらを参考に、PRISMA 声明⁸⁾(Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses: システマティックレビューやメタアナリシスの報告ガイドライン)の拡張版として、スコーピングレビューの報告のガイドラインを発表している(PRISMA-ScR: PRISMA extension for Scoping Reviews)⁹⁾。現在、ほとんどの

表2 スコーピングレビュー実施のためのArksey & O'Malley の方法論的フレームワークの概要(文献7より著者翻訳)

Arksey & O'Malley framework stage	説 明
1 研究疑問を特定する	研究疑問を特定することは各段階のロードマップとなる。検索ストラテジーに影響するため、疑問のポイントを明確に定義すべきである。広い範囲から検索するため、研究疑問は本質的に幅広くなる。
2 重要な研究を特定する	この段階では、関連する研究を特定し、検索する場所、使用する用語、検索する情報源、期間、言語についてのプロトコルを作成する。検索では網羅性と幅広さが重要である。ソースには電子データベース、文献リスト、主要雑誌のハンドサーチ、組織や会議などが含まれる。幅広さが重要だが、検索の実現性も考慮する。つまり時間、予算、人員のリソースは潜在的な制限因子になり、これらが検索にどのように影響するかを事前に決定しておく必要がある。
3 研究を選ぶ	研究の選択には、事後的な選択および除外基準も含まれる。これらの基準は、詳細な研究疑問や、研究論文を読むことによる主題への新たな知見に基づいている。
4 データを抽出する	データ抽出フォームを作成し、各研究からデータを抽出する。「ナラティブレビュー」や「記述分析」などの方法は、各研究からコンテキスト/プロセス指向型の情報を抽出するために用いられる。
5 結果の収集、要約、報告	分析のフレームワークやテーマの構成は、結果の統合というよりは文献の幅広い概要を提供する。研究の範囲や性質に用いられる量的分析された図表が示される。次にテーマ分析が示される。結果を報告する際には、明解さと一貫性が必要になる。
6 結論	消費者と利害関係者が関与する機会を提供し、追加の参照の提案や文献にあるものを越えた洞察を提供する。

スコopingレビューではこれらの論文を引用しながら実施されており、実施する前に原典^{4, 6, 7, 9)}を一読しておくことを推奨したい。以下、表2に沿って、スコopingレビューのポイントとなる箇所を抜粋して解説する。

1) 研究疑問を特定する

スコopingレビューは、網羅的かつ探索的に実施されるため、研究疑問は、なぜ？(WHAT)、どの程度？(HOW)、といったタイプの問いになる。システムティックレビューにて研究疑問を作成する際、Patient, Intervention, Comparison, Outcomeの頭文字をとった“PICO”のフレームワークを活用するが⁸⁾、スコopingレビューではPatient, Concept, Contextの“PCC”⁷⁾がこれに該当する(表3)。これらのフレームワークの活用は必須ではないが、研究疑問はレビューを進めていく際のロードマップ(道しるべ)となるため、可能な限り明確にしておくことと、プロトコル、タイトル、研究背景、目的、選択/除外基準などで統一されているかを常に注意する。スコopingレビューの97%が研究疑問を明確に定義している¹⁰⁾。研究目的と研究疑問の具体例は以下の通りである。

“研究1 : ^{7, 11)} ...このスコopingレビューは、この領域で行われた研究を系統的にマッピングすること、同様に既存の知見のギャップを特定することを目的に実施された... 研究疑問は以下の通りである：身体障害のある子どもたちの社会参加が可能となるまで、親のニーズ、課題、行動に関して文献で分かっていることは何か(What)？”

“研究2 : ¹²⁾ 我々の包括的な研究疑問は以下の通りである：作業療法研究者が実施している脳卒中リハビリテーションにおいてEBPs (evidencebased practices) をどの程度(How)実施しているか？我々は、次の2つの領域に言及した研究を検索することとした：(1)

作業療法士による脳卒中リハビリテーションのEBPsを促進あるいは阻害する決定因子(は何か？(What), 著者挿入)、(2)作業療法士による脳卒中リハビリテーションのEBPs実践を促すために検討された戦略(は何か？(What), 著者挿入)。

2) 重要な研究を特定する

事前のプロトコルで文献の検索式を作成する。スコopingレビューは探索的に行われるため、基本的には事前に作成したプロトコル通りに行くが、途中で変更しても構わない(変更した理由は記載する)。文献の検索は、研究疑問や“PCC”に従うと様々なガイドラインで示されているが、実際どのように検索するのか記されていない。よって、スコopingレビューでの検索方法として指定されているわけではないが、検索式を決めていく際の一般的な手法を述べる(表4)。

まず検索対象の概念(表4では#の行)を決め、その概念を表す検索ワードを加えていく(表4では縦の列)。そして概念は「AND」、検索ワードは「OR」でつないで検索式を作成する。表4の例では、(“cerebrovascular disorder” OR stroke OR “brain infarction” ...) AND (“occupational therapy” OR “occupational therapist”) AND (goal OR “goal-setting” OR plan OR target) AND (acute OR “post-acute” OR “sub-acute”) という検索式になる。ボキャブラリーの統制、演算式、研究デザインや言語を絞ったりする機能などはデータベースによって異なるため、事前に確認しておく。基本的にはプロトコルに全ての検索式を記載しておくことが望ましい。なおスコopingレビューでは、研究デザインの種類も比較的幅広く採用され、文書、ブログ、Webサイト、インタビュー、意見などを含めることもある⁷⁾。既存のスコopingレビューにおいて、Gray literature (研究論文以外の刊行物)は52%で取り入れられている¹⁰⁾。

3) 研究を選ぶ

どの研究を選択するかは、上記の“PCC”に加え、文

表3 研究疑問作成のためのフレームワーク：PCC

研究疑問	説明	例
P : Patient 患者	参加者の重要な特性や年齢など、スコopingレビューの目的や研究疑問に合わせ、詳細に説明する	脳血管障害者、成人以上
C : Concept 概念	スコopingレビューで検討するコアコンセプトについて、検索する範囲と幅を決定するために明確にしておく。例えば「介入」や「関心のある現象」、「アウトカム」、「研究デザイン」など。詳細に記載する。	作業療法、目標設定の実施状況や内容
C : Context 文脈	研究疑問によって異なる。文化、場所(急性期、地域)、領域など。国や場所を限定することもできる。	急性期、日本

表4 文献検索式作成のための表

概念	#1 脳血管障害	#2 作業療法	#3 目標設定	#4 急性期
検索ワード	<ul style="list-style-type: none"> • cerebrovascular disorder • stroke • brain Infarction • cerebral Infarction • lacunar • brain injury 	<ul style="list-style-type: none"> • occupational therapy • occupational therapist 	<ul style="list-style-type: none"> • goal • goal-setting • plan • target 	<ul style="list-style-type: none"> • acute • post-acute • sub-acute

献の種別（研究論文以外も含めるか）、過去何年分など、プロトコルで決められた選択基準に沿って機械的に進めていく。図1にその手順を示すが、まず「選抜」はタイトルと要旨でスクリーニングし、次に文献を入手して全文を読み込み「適格性」が確認できたものを選択文献とする「採用」。この選択プロセスは2名以上が別々に並行して実施し、意見が割れた場合には第3者を交えて決定する。PRISMA-ScRでは、文献採用までのプロセスをフローチャートにまとめることを推奨している⁷⁾ (図1)。そのため、文献を選別する際には、選択した文献のみならず除外した文献や除外した理由も記録しておく。

4) データを抽出する (Charting)

スコーピングレビューでは、文献からデータを抽出することをChartingと呼ぶ。プロトコルで事前に検討したフォームを用いて抽出する。抽出するデータのごく一般的な例を表5⁷⁾に提示した。何の項目を抽出するかはスコーピングレビューの核とも言えるため、研究疑問に沿って事前に十分吟味しておく。実際には、最初いくつかの文献からスクリーニング的にフォームを使ってデータを抽出し、プロトコル通りで問題ないか確認してから進める。もし変更があれば変更しても良いが、その理由などを論文執筆の際には報告する。データ抽出も、独立した2名が同時並行で行う。

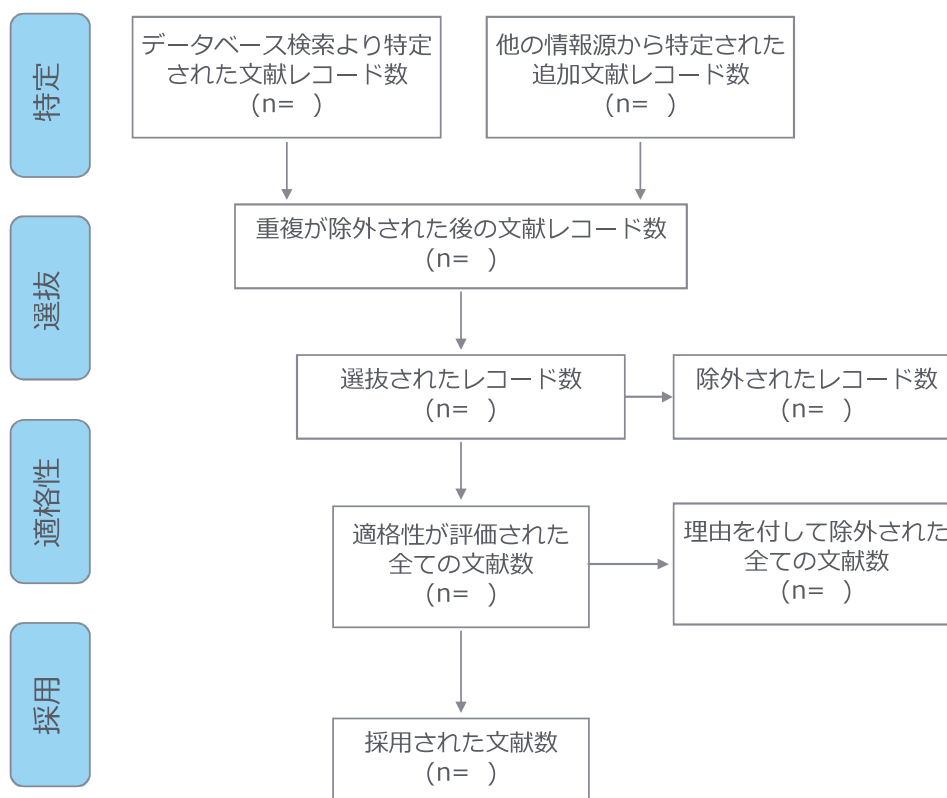


図1 スコーピングレビューのためのPRISMAフローチャート（文献7より著者翻訳）

表5 抽出するデータの一般的な例 (文献7より著者翻訳)

1) 著者
2) 発行年
3) 国, 地域
4) 目的
5) 対象, サンプルサイズ
6) 方法
7) 介入タイプ, 比較群など
8) アウトカム, 測定方法
9) 研究疑問に応じた主要な発見

5) 結果の収集, 要約, 報告,

スコーピングレビューの目的は, 研究目的や疑問に応じて, 既存の知見をマッピングしたり, ギャップを特定したりすることである。選択された文献一つ一つについても著者名, 発行年など, 原典が特定できるように最低限度の情報を表でまとめておく。内容の要約については, その結果を表で示すことがほとんどであるが⁸⁾ (82%のスコーピングレビューで表を使用¹⁰⁾), 中には年次推移を折れ線グラフで示したり, 内容分析によってグラフィカルな図が用いられることもある (17%¹⁰⁾)。またバイアスリスクのチェックといった個々の論文の質のチェックはスコーピングレビューでは14%で¹⁰⁾, PRISMA-ScRでも任意のチェック項目となっている。これはスコーピングレビューがWebサイトなど既存の様々な文献 (情報) を対象としているため, バイアスチェックを行うとその辺の情報が除外されてしまうことや, スクリーニング的に素早くレビューするという目的もあることを考慮すると妥当であろう。

6) 結論

結論では, 結果を要約し, 研究疑問や目的に答えているか, 結果を使用する関係者 (医療者, 患者, 消費者, 政策立案者など) のニーズに合っているかを確認する。研究のギャップなどの結果に基づき, 今後の研究の必要性について述べる。その他, 手順や検索範囲, 変更などについて, 研究の限界を書く。なお考察にて論じられていた内容は, 既存の研究におけるギャップが85%, 今後の研究への示唆が84%, システマティックレビュー実施の示唆は12%となっている¹⁰⁾。これらの数値からも, スコーピングレビューは, 何らかの研究を始める前に, その領域の既存の知見をまとめるために行われていることが分かる。

スコーピングレビューの報告ガイドライン

報告ガイドラインとは, 本来論文を執筆する際に著者が最低限含める項目が記載されており, 内容に見落としがないかチェックするためのものである。しかし研究者

が研究計画を策定する際, 査読者が査読を行う際など, 様々な場面でも活用が期待されている。この報告ガイドラインは, 国際的なネットワークであるEQUATOR Network (Enhancing the QUALity and Transparency Of health Research)¹³⁾ が統括しており, これまで, ランダム化比較試験はCONSORT¹⁴⁾, 観察研究ではSTROBE¹⁵⁾, システマティックレビューであればPRISMA⁹⁾ と, 様々なガイドラインが公表されている。

スコーピングレビューの報告のガイドラインは, 2018年, TriccoらがPRISMAの拡張版として, PRISMA-ScRを発表した (オープンアクセス)⁸⁾。これは24名の専門家と2名の研究者が, EQUATOR Networkのガイダンスに準じて, デルファイ法を用いて開発された。PRISMA-ScRは, PRISMA声明の項目から5項目 (PRISMAの項目番号13, 15, 16, 22, 23) が除外され, 2項目は任意とされた (PRISMAの項目番号12, 19)。最終的に20の必須項目と2つの任意な項目 (PRISMA-ScRの項目番号: 12, 16), 合計22項目で構成されている⁸⁾。任意な項目とはバイアスリスクのチェック項目である。スコーピングレビューでは, ブログやインタビューなど様々な情報を対象とすることができるため, 項目12, 16は任意となっている。

表6にPRISMA-ScRの日本語版について示す。これは著者のTriccoとEQUATOR Networkに許可を得て, 著者らで翻訳した。原典⁸⁾には具体例なども記載されているため, それも確認しつつ使用していただきたい。

おわりに

スコーピングレビューは, 幅広い情報を素早く概観しながら研究のギャップを特定し, 次の研究につなげることを主な目的としている。まだ新しいレビューの手法であり, 今後アップデートされる可能性もあるため, 常に最新の情報を得ながら実施するようにしたい。

文献

- 1) Grant M, Booth A: A typology of reviews: an analysis of 14 review types and associated methodologies. *Health information and libraries journal* 26(2): 91-108, 2009.
- 2) Munn Z, Peters M, Stern C, Tufanaru C, McArthur A et al.: Systematic review or scoping review? Guidance for authors when choosing between a systematic or scoping review approach. *BMC Medical Research Methodology* 18(1), 143, 2018.
- 3) Centre for Reviews and Dissemination, University of York: PROSPERO. <https://www.crd.york.ac.uk/prospéro/> (accessed 2020-9-8)
- 4) Arksey H, O'Malley L: Scoping Studies: Towards a

- Methodological Framework. *International Journal of Social Research Methodology: Theory & Practice* 8(1), 19-32, 2005.
- 5) Ehrich K, Freeman G, Richards S, Robinson I, Shepperd S: How to do a scoping exercise: continuity of care. *Res Pol Plan* 20: 25-29, 2002.
 - 6) Levac D, Colquhoun H, O'Brien K: Scoping studies: advancing the methodology *Implementation Science* 5(1): 69, 2010.
 - 7) Peters MDJ, Godfrey C, McInerney P, Baldini Soares C, Khalil H, Parker D. Scoping reviews. In: Aromataris E, Munn Z, eds. *Joanna Briggs Institute Reviewer's Manual*. Adelaide, Australia: Joanna Briggs Inst; 2017. <https://reviewersmanual.joannabriggs.org/> (accessed 2020-9-8)
 - 8) Moher D, Liberati A, Tetzlaff J, Altman D, Group T: Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses: The PRISMA Statement. *PLoS Medicine* 6(7), e1000097. 2009.
 - 9) Tricco, A., Lillie, E., Zarin, W., O'Brien, K., Colquhoun, H., et al. : PRISMA Extension for Scoping Reviews (PRISMA-ScR): Checklist and Explanation. *Annals of internal medicine* 169(7) 467, 2018.
 - 10) Tricco AC, Lillie E, Zarin W, O'Brien K, Colquhoun H, et al. :A scoping review on the conduct and reporting of scoping reviews. *BMC Med Res Methodol.* 16: 15. 2016.
 - 11) Piškur B, Beurskens AJ, Jongmans MJ, Ketelaar M, Norton M, et al: Parents' actions, challenges, and needs while enabling participation of children with a physical disability: a scoping review. *BMC Pediatr.* 12: 177, 2012.
 - 12) Juckett, L., Wengerd, L., Faieta, J., Griffin, C.: *Evidence-Based Practice Implementation in Stroke Rehabilitation: A Scoping Review of Barriers and Facilitators*. *American Journal of Occupational Therapy* 74(1), 7401205050p1. 2019.
 - 13) EQUATOR Network. <https://www.equator-network.org/> (accessed 2020-9-8)
 - 14) Schulz K, Altman D, Moher, D: CONSORT 2010 Statement: updated guidelines for reporting parallel group randomised trials. *BMC Medicine* 8(1): 18, 2010.
 - 15) Elm E, Altman D, Egger M, Pocock S, Gøtzsche P, et al.: Strengthening the reporting of observational studies in epidemiology (STROBE) statement: guidelines for reporting observational studies. *BMJ* 335(7624): 806, 2007.

表6 スコーピングレビューのための報告ガイドライン (PRISMA-ScR) 日本語版

セクション	No	PRISMA-ScR チェック項目
タイトル		
要約		
序論		
方法		
結果		
考察		
資金		
タイトル	1	スコーピングレビューということが記載されている
要約	2	背景, 目的, 選択基準, 文献の出典, 抽出方法, 結果, 研究 (レビュー) 疑問や目的に関連した結論, などが (適宜) 含まれている. 構造化要約が記載されている.
序論	3	既知の事項と照らし合わせて, レビューの理論的根拠が記載されている. 研究疑問/目的に対してスコーピングレビューが適している理由が説明されている.
目的	4	研究疑問や目的が明確に述べられており, 研究疑問/目的の概念化に用いられた主要な要素 (母集団や対象者, 概念, 文脈など) や, その他の要素についても言及されている.
方法	5	レビュープロトコルの有無, 閲覧の可否やその方法 (Webアドレスなど), 閲覧可能であれば, 登録番号を含む登録情報が記載されている.
選択基準	6	選択基準として用いられる文献 (情報) の出典の特徴 (検索対象期間, 言語, 出版形態など) が具体的に記載されている, また理論的根拠が提示されている.
情報源*	7	検索に用いた全ての情報源 (データベースと対象期間, 追加情報を得るために著者に連絡した, など), ならびに最新検索日が記載されている.
検索	8	少なくとも1つのデータベースにおいて, 再現できるように, 使用された全ての "limits" を含む完全な電子検索式が記されている.
文献の選択†	9	文献を選択したプロセス (スクリーニング, 適格性など) が記載されている.
データ抽出のプロセス‡	10	分析対象となった文献から, データを抽出する方法 (例: 調整されたフォームあるいは使用前にチームによって検証されたフォーム, データの抽出が単独あるいは複数名で行われたかどうか) や, 研究者からどのようにデータの取得と確認を得たのかのプロセスが記載されている.
データ項目	11	取得されたデータや, あらゆる仮定・簡略化された全ての変数が, リスト化および定義されている
特定の文献に対する批判的評価 §	12	もしその文献に対する批判的評価が実施されている場合は, その理論的根拠が示されている; 使用された方法, そしてこの情報がデータ統合において, どのように用いられたか記載されている (該当する場合)
結果の統合	13	抽出されたデータがどのように扱われ, 要約されたのか記載されている.
結果	14	フローチャートなどを用いて, スクリーニング, 適格性の評価, 分析対象となった文献数をそれぞれ明記し, 各段階での除外理由についても記載がなされている.
文献の選択	15	各文献について, 抽出されたデータの特徴や引用元も記載されている
文献の特徴	16	文献に対する批判的評価がなされている場合は, その情報が記載されている (項目12参照)
文献の批判的評価	17	分析対象となった文献ごとに, 研究疑問や目的に関連したデータが抽出され, 記載されている
各文献の結果	18	研究疑問や目的に対応するように抽出された結果が, 表記あるいは要約されている.
結果の統合	19	主要な結果 (研究の概要, テーマ, 利用可能な文献の種別を含む) の要約と, 研究疑問や目的と対応させながら, 結果 (重要なグループ) の妥当性についても検討されている
文献の要約	20	スコーピングレビューの方法論としての限界について検討されている
限界	21	研究疑問や目的に対する結果の解釈について述べられており, 臨床の有用性や可能性, 今後の展望についても記載されている.
結論	22	スコーピングレビューおよび選択された文献に対する資金源について述べられている. スコーピングレビューにおける資金提供者の役割が記載されている.
資金		

*文献データベース, ソーシャルメディアプラットフォーム, Webサイトなど, 文献や情報が編纂される場所 (二番目の脚注を参照)
 † 研究論文だけでなくスコーピングレビューの対象となりうる様々なタイプの文献あるいは情報 (例: 量的および/または質的研究, 専門的意見, 政策文書) についても確認するために, より包括的・多分野の用語が用いられる. これを情報源と混同しないこと (1番目の脚注を参照)
 ‡ Arksey & O'Malleyや, Levacらによるフレームワークや, JBIガイダンスでは, スコーピングレビューのデータ抽出プロセスを "data charting" としている. (したがって本稿でもChartingは "抽出" と訳す).
 § 研究のエビデンスの判定に先駆けて, その妥当性, 結果, 関連性について, システマティックに検討するプロセス. スコーピングレビューの対象となる様々な種類の情報 (例: 量的および/または質的研究, 専門的意見, 政策文書) を包括・言及するため, この用語は項目12, 19において, "バイアスリスク" (介入のシステマティックレビューでより適用) の代わりに用いられている.
 JBI = Joanna Briggs Institute; PRISMA-ScR = Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses extension for Scoping Reviews.
 原典: Tricco AC, Lillie E, Zarin W, O'Brien KK, Colquhoun H, Levac D, et al. PRISMA Extension for Scoping Reviews (PRISMAScR): Checklist and Explanation. Ann Intern Med. 2018;169:467-473. doi: 10.7326/M18-0850.